



野中ともよ NPO法人ガイア・イニシアティブ代表理事

破壊を創造のはじまりに

どんなに深い黙祷を捧げても、どんな言葉を並べても、届かない。足りはしない。

世界第二位の債権国で、ほんの一瞬の、地球にしてみれば、唾にもみたない少しの揺れを受けて、40万人の難民と、3万人にのぼる方々の尊い命が奪われた。たったの、ひと揺れで。

深い雪に一年の多くをとぎされて、春の、ささやかに、でも、力強くはじまる訪れに感謝を捧げる……そんな厳しい自然の懐の中で、何世代にも渡って生き抜いてきた東北の人々は、静かに、その大きな破壊力を受け入れていた。

震災二日目の朝、大破した港のガレキの中で呆然と立ちつくす漁師の背中があった。海を見つめながらの一言が心に刺さる。
「この腕さえついでりや、また漁さできるべえ。農業も手伝えるしなあ……。……海が悪いんじゃないねえ。」
幾重にも深く刻まれた皺をくしゃくしゃにした顔は、涙に光りながら、笑顔をつくっていた。
生きているのではなしに、生かされている自分。人間のいのちなんて、そんなものさ……。あまりに残酷で、あまりに希有な、いのちの真実の上に、しっかりと立脚する男の人生があった。

豊かな資産を築こうと、人も、国も、すべての営みは、自然の理の掌の上にある。
どんなハイテク工場でも、いのちは創れない。焼け野原一面の第二次大戦からの復興力が、今日の、日本を築いてきた。でも、その奮進力の中で、私たちが置き去りにしてきたものはなかつたか。
もう一度、謙虚にそのことに思いを馳せよ、そんな地球の声(ガイア)が聞こえてくる。
もはや救災の時を越えて、復興なのだから、前よりもどんどん消費をして、暗い自粛生活はやめにしようよ、という掛け声も聞こえはじめている。
暗い気分そのままのままでいるべきとは、全く思わない。でも、あの狂乱とも呼ぶべきバブル時代を頂点にする、残り香にも似た甘い記憶を引き摺りながら、ひたすらに再び「消費する景気」のめもりをあげようと考えてるのは、もうやめたい。
物欲、食欲、性欲、知識欲……。欲望という名のエネルギーこそ、人生を支えてくれるターボチャージャー。大切だ。
お金も同じく大切なパートナーではある。でも、いずれも、いのちがあつてこそそのお道具でしかない。どちらも、いのちを輝かせるための道具であつて、目的などではない。
消費することで、シチズンシップを獲得してきた戦後日本の「消費者」の看板から、一人ひとりが「創業者」に

なつてしまつた。そんな生き方を提案したい。
自分という一人の人間の企業化と言つてもいい。より多くのお客さまに喜んでもらうためには、嫌いなことより、好きなこと。磨いてみがい精進に励むこと。「傍(ハタ)を業(ラク)にしてさしあげる。それが働くということよ。喜んで下さる方が多ければ多いほど、あなたは幸せをいただけるのだから」
実は、小さい頃から祖母に言われ続けてきたこともある。
生き残つた私たち一人ひとりが、真剣に価値のめもりを変える。そして生き方をシフトしていくことをしなければ、一瞬にして命を奪われてしまった多くの方たちに申し訳がたたない気がして仕方がない。
ひき続き収束しない、目には見えないう放射線との戦いも、かかっている。
この国で起きたこのたびの震災の意味は一体何だったのか。
この問いを、自分自身を、もう一度見つめ直してみる作業と同時に、問い続けることが、大切なのだと思う。

野中ともよ

NHK、テレビ東京などで番組キャスターとして活躍後、アサヒビル、三洋電機など企業の取締役や経営顧問を歴任。財政制度審議会など政府審議会委員も多数業務。2007年NPO法人ガイア・イニシアティブ設立、代表を務める。